

愛知県愛西市立草平小学校

問い合わせ先: 電話番号0567-28-2569

I 学校の概要

- 1 児童生徒数, 学級数, 教職員数(平成21年2月)
 - (1) 児童数 517名
 - (2) 学級数 17学級(特別支援学級を含む)
 - (3) 教職員数 32名

2 地域の概況

本校の位置する愛西市は平成17年4月に佐屋町、立田村、八開村、佐織町の2町2村の合併により誕生した。名古屋市の西方20kmにあり、岐阜県、三重県との境界に位置している。地勢は平坦で、木曾川の沖積層という肥沃な土壌に恵まれ、ほぼ全域が海拔0m以下となっている。農地や水面をはじめとした自然が多く広がっており、学区となる佐織地区も市街化区域が約5%、農地、調整区域が90%以上を占めて、豊かな自然に恵まれている。児童は登下校を含め生活の場が豊かな自然に囲まれているため、四季折々の動植物と触れ合いながら、のびのびと日々をすごしている。学校では学年の花壇や畑があり、季節に合わせて土に触れながら収穫や栽培の喜びを味わっている。

児童にとって、豊かな自然に恵まれた環境は、日常の生活の場として当たり前環境であり、特に恵まれているという意識はなかったが、環境学習を進めてきたことにより、身近な環境に関心をもち、今ある豊かな自然を守っていこうとする意識が高まってきている。

3 環境教育の全体計画等

環境教育の目標は「人と環境の共存」とし、人が生きていくためには水も動植物もすべての環境が大切であり、最終は「すべての命の大切さ」につなげて環境教育を行うこととした。最初に、児童をとりまく「環境とは何か」を具体的にとらえ、低中高学年で、目標を明らかにした。

低学年は「自然環境」とし、児童の身近にある自然を中心とした環境そのものをとらえさせる。

中学年は「地域環境」とし、生活の場から県内における自然、生活を対象とした地域までとらえさせる。

高学年は「社会環境」とし、広い視点から自然をとらえ、生活や文化にも目を向けさせる。

環境教育を進めるにあたり、これら「自然環境」「地域環境」「社会環境」を発達段階に合わせなが

ら、常に児童の生活との関連を大事にし、かけがえない環境を大切にしたいという気持ちをもたせることをねらいとした。

II 研究主題

「環境、その明日を考える」

一 自然・地域・社会とともに

歩める子どもをめざして 一

研究主題の設定理由

環境に関連する学習を各教科等において体系的、継続的に行っていけば、環境に対する豊かな感性が養われ、確かな見識を持って、進んで環境にかかわろうとする子どもが育つであろうと考え、本主題を設定した。

III 研究の概要

1 研究のねらい

(1) 育てたい子ども像

最初に本校の環境教育を通して育てたい子ども像を次のように考えた。

① 豊かな感受性を育成する教育(心を育てるために)

- ・ 身近な環境の様子について関心を持ち、豊かな感受性を持つ子
- ・ 遊びや体験を通し、自然を大切にしようという心をはぐくめる子
- ・ 人間の活動と自然との調和を大切にする子

② 活動や体験を大切にする教育(考え行動できるために)

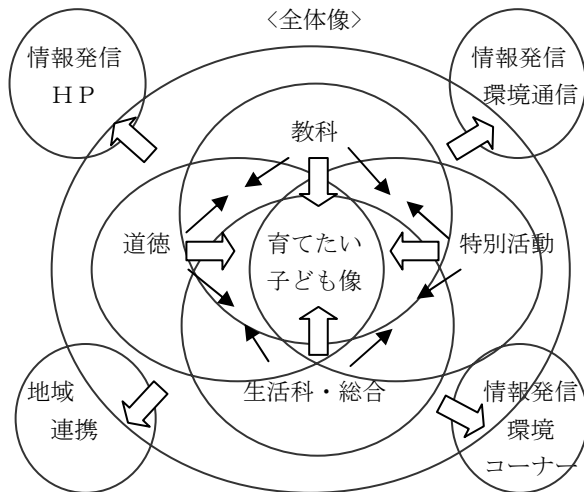
- ・ 環境を思いやり、よりよくしていける子
- ・ 環境とのかかわりの中で、考え、判断し、行動できる子
- ・ 心身の健康を、取り巻く環境から考え実践できる子

③ 身近な問題を重視する教育(よりよく生きるために)

- ・ 課題を見つけ、追究し、創造したことが生かせる子
- ・ 家庭、地域社会の生活の中で、環境にふれあい働きかける子
- ・ 環境とともによりよく生きるために実践できる子

(2) 全学年のねらい

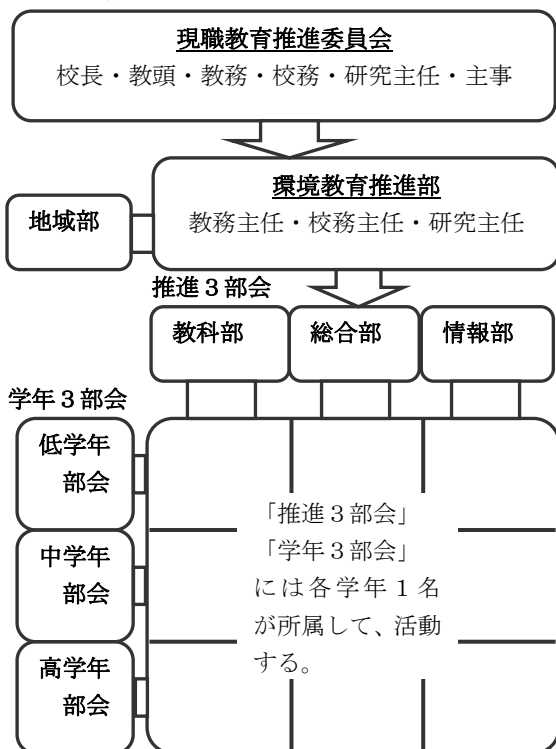
本校では、すべての学年で環境教育を推進するという視点で、各教科の年間カリキュラムを見つめ、環境に関連する内容をまとめ、環境ナビゲーション作りを行うことで、各教科、道徳、特別活動の目標や内容の見直しを行なっていく。これにより各教科等の内容の中にある、環境教育に関連する内容を取り上げ、教科等の学習から環境学習を進めることを大きなねらいの一つとした。



また、他教科との関連を図っての環境学習指導も系統的に学習の積み上げることにより、どの学年においても成果を上げることができると考え、図の全体像のように、環境教育を教科、道徳、特別活動、生活総合のすべての教育活動で取り組むことで、育てたい子ども像にせまりたいと考えた。例えば理科の発展的な内容「生き物がすみやすい川づくり」をさらに広げ、総合的な学習の時間で、自然共生研究センターに行くなど、校外学習や体験学習を有意義に行うことで、教科等の学習で学んだ環境学習を、さらに深めることを研究の大きなねらいとした。

2 校内の研究推進体制

研究の組織



研究の組織として、「現職教育推進委員会」にお

いて策定された基本方針をもとに、「環境教育推進部」で、環境教育の計画、内容等の検討を行い、推進3部会へ提案する。推進3部会には「教科部」「総合部」「情報部」を設置し、教科部では教科の授業を中心に「環境を大切にする心を育てる」ことをねらいに研究を進めた。また、総合部では生活科や総合的な学習の活用をねらいに「体験学習」の計画を行う。さらに情報部では教科の学習や総合の体験で学んだことを情報発信する活動を行った。

3 研究内容

(1) グローブの教育課程への位置付け

① 教科課程と環境教育

各教科の目標や内容は環境教育と大きくかわっており、教科の学習だけでも環境教育の目標の多くは達成できると考え、教科部では教科学習や道徳等で環境にかかわる学習の機会や場を計画的に設けることができるよう以下の活動を行ってきた。

ア 「環境ナビゲーション」の作成

環境教育は、学校の全教育活動を通して行われるものであり、その推進のためには教育課程上の位置づけを明確にする必要がある。

「環境ナビゲーション」（年間指導計画）の作成に当たっては、各教科、道徳、特別活動の目標や内容について環境教育を推進するという観点に立って検討するとともに、その取り扱い方を明らかにしておくことが大切であると考えた。

指導計画の作成においては、各教科等の相互の関連や連携を図り、環境教育に関わる個々の事項を学校全体の教育計画の中に位置づけられるような工夫をする必要がある。そのことによって、一見環境教育とはかわりがないと思われる事項についても、その関連性が明らかになる場合もある。また、自然教室などの野外での宿泊を伴う教育活動などは、学校の教育活動全体の中においてどのような意味を持っているかを明確にして位置づけることが大切であると考え、以下のことに留意し「環境ナビゲーション」を作成した。

- ・ 教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間に環境学習を系統的に進める。
- ・ 環境学習を行うことができる単元を取り出し、「自然環境」と「社会環境」にかかわるものに分けた。
- ・ 一部の教科だけで行うのではなく、多くの教科、道徳、特別活動を通して行う。
- ・ 環境ナビゲーションを活用し、他教科や他領域との関連を明らかにした。

るのです。食べ物に感謝したい」とか「私たちは命をいただいている。これからも、『いただきます』を忘れない」などの発言が聞かれた。これは、環境と人とのつながりを考えると同時に、環境から命の大切さを考えることのできた授業であった。

② 体験活動と環境教育

総合部では、教科や道徳などの環境学習で積み上げた環境に対する知識や環境改善への意欲を、総合的な学習や生活科での体験活動に生かすよう、学年間の調整を図りながら、以下の活動を行ってきた。尚、総合的な学習の時間は、70時間をあてた。

1) 「総合的な学習の時間」「生活科」の活用を年間計画としてまとめる。

<総合の年間テーマと内容一覧>

テーマのねらいは、低学年「自然環境」、中学年「地域環境」、高学年「社会環境」とした。

年	テーマ	ねらい	活動内容
1年	ぐんぐんのびろ ・五感で四季を感じよう	身近な植物に興味・関心を持ち、それらに生命があることに気づき、植物を大切にすることを育む。	植物の栽培、クラスの木への継続観察、木の葉や実を使った遊びや工作、野道の散策遊び
2年	草平がつく、大すきたんけん ・自然や人々との関わり	校区探検を行い、住んでいる校区の人や自然について知る。自然との触れ合いの中で自然への関心を高める。	学区探検、草平マップ作成、野菜の栽培、自分の木の継続観察、生き物の観察
3年	見つけよう、人にやさしい愛西市 ・わたしたちにもできるよ	身近な施設や工場の見学を通して、環境やボランティアに関心をもち、自分たちにできることを考えたり、伝えたりする活動に取り組む。	身近な施設や工場見学、ボランティア実践、環境に配慮したまちづくり、活動発信

4年	ふるさと草平探検隊 ・暮らしと環境	毎日の生活を見直すことにより身近な環境問題に気づき、環境を大切にしていこうとする気持ちを高める。	くらしを守る仕事、水のゆくえ、ごみの関わりについて調べ、環境の大切さに気づく。ふるさとを大切に二分の一成人式
5年	見つけ直そう自然環境 ・身近な自然を見つけて	郷土の自然や産業に目を向け、自然を感じ、自然を考え、身近な環境をよりよいものにしていく気持ちを高める。	バケツで稲作り、自然にやさしい野外炊飯、ウォークラリーやネイチャーゲーム、新聞記事を収集まとめ
6年	守ろう地球、知ろう世界 ・過去から未来へ	身近な環境から課題を見つけ、追究・実践し、環境を大切にしようとする気持ちを高める。	法隆寺ウォークラリーや太秦寺子屋体験、出前授業や調べ学習、調べたい国を決め、環境問題への取り組みを発表する。

(2) グローブを活用した教育実践

① 1年生の実践

『ぐんぐんのびろーごかんできせつをかんじようー』をテーマに、身近な自然環境に目を向け、自然との触れあいや探検、遊びを通して自然への興味・関心を持つことをねらいに実践を進めた。

春の草花探検では、自然案内人に木々や植物の名前、草花の遊び方などを教えてもらい、興味を持ち、手にとって楽しく遊ぶ様子が見られた。また、校庭の木々の中からクラスごとに木を決め、四季を通して継続観察した。季節により木々の様子が変化することや「また、春には花が咲くね」と木も生きていることに気づいた。



サクラの葉のみつせんはどこかな？



シロツメグサでゆびわを作ったよ。

秋には、自然案内人と春と同じコースを探検した。同じコースを歩くことで、春には見られな

った草花や虫たちを見つけて、「秋の草花には、くつつく草花が多いね」という言葉も聞かれた。また、校庭で秋さがしビンゴをしたり、校庭で拾い集めた銀杏を煎って食べ、みんなで秋を味わったりした。さらには、自然物を使ってのリース作りや育てたマリーゴールドの花を使っての草木染めなど、身近な自然物を使っての遊びや体験を通して、身の回りの自然をより身近に感じることができ、自然環境への興味・関心が広がった。



花壇には、たくさん
のコスモスがきれ
いにさいてるね。

② 2年生の実践

『草平大すき、たんけんたい—ふれあおう、自然と人々—』のテーマのもと、校区探検を行い、住んでいる校区の人や自然について知ったり、自然とのふれあいの中で自然への関心を高めたりしてきた。

町探検では、働いている人や、施設、生き物や草花を見つけに行った。春には「おたまじゃくしがいるよ。」秋には「大豆があるね、柿がなっているね。」と季節を感じる言葉が出てきた。



春と秋に探検に行き、絵地図に表した。それを比べることにより、季節の移り変わりにともなう自然の変化に気づくことができた。



校庭にある木々から一本の木を選び、一年を通して観察した。その中で、季節によって大きく姿を変える木や、そうではない木があることをつかむことができた。

校区にある施設やお店の見学では、自分で見学先を選び、見学先の方にインタビューをしているいろいろなことを教えていただき、場所やもの、人々とのかわりを見つけることができた。



③ 3年生の実践

『見つけよう 人にやさしい愛西市』のテーマ

のもと、身近な環境の中で、自然のよさに出会わせたり、生活の場に目を向けさせたりして、進んで環境に関わらせたいと実践を進めた。

校内でフィールドビンゴを行ったり、ゲストティーチャーに依頼し、地域を歩きながら自然観察を行ったり、クイズを解きながら森を探索した後、インタープリターの解説を受けたりして、身近な自然を通して、地球全体の環境を見ることができるとを学んだ。

また、「ストップ!おんだんか」の出前授業を行っていただいたり、工場や企業、お店の見学を通して、環境にやさしい取り組みについて調べ、自分たちができることは何か考えた。

歴史民俗資料館や昭和30年代の家を見学では、自然と人間が密接な時代の暮らしぶりを体験した。

学んだこと、調べたことなどは、誰ににどんな方法で、どんなふうにしてほしいのかを考えさせながら、伝えた。



「ぼく、学校に来るとき、生き物や植物を見ながら来ているよ」と報告する児童、兄弟で同じ部屋で本を読むようにして、一つ電灯を消した児童など、家庭においても環境を考えた行動がとれるようになってきている。

④ 4年生の実践

『ふるさと草平探検隊—くらしと環境—』をテーマに、地域にある施設で仕事をする人々の環境への取り組みを調べ、くらしに関わる身近な環境に目を向け、できることから実践する児童が一育つことをめざし、実践を進めた。

「くらしとごみ」の学習では、ごみを処理するのにお金がかかることを知り、「ごみを出さないようにしよう」と多くの児童

が気づくことができた。「くらしと水」の学習では、飲み水をつくるのに、使い終わっ



<下水処理場見学>

た水を処理するにも大変時間がかかることを学んだ。その結果、「コップ1杯の水で手洗い、うがいをするようになった。」という発言が聞かれ、児童の中に、水を大切にしようとする気持ちが生

まれたようである。さらに、「安全を守る」の学習では、「人と人が助け合ってこそ生きられるんだなあ。」と、地域の人たちに守られていることに気づくことができた。特に、児童が見学したどの施設の人々も、自分たちの暮らしを守るために24時間休まず働いていることに驚き、「自分は、ありがとうの『あ』の字もないまま過ごしてきた。」と生活をふり返り、感謝の気持を持ったようである。

こうした学習の後、身近な環境に目を向けさせようと、児童それぞれに課題を持たせ、地域の環境調査にも取り組ませるようにした。そして、結果をポスターにまとめ、ポスターセッション形式で発信活動を行った。互いの発表を聞くことで、児童は、地域のごみの多さに改めて気づき、地域で様々なリサイクル活動が行われていることを知ったようである。



<ポスターセッションをする児童>

これらの活動を通

し、児童は、「ごみを出さないようにすることが大切である。」「何気ない日常生活の中で、無駄をなくすことができる。」ことなどに気づき、学校でも家庭でも環境を意識した生活ができるようになりつつある。

⑤ 5年生の実践

『自然環境に目を向けよう』のテーマのもと、身近な環境に関心を持ち、五感をフルに使って、身近な自然環境や地域の自然環境を感じ、感動できる心を育んでいきたいと考え実践を進めた。野外教室では、講師の先生の指導のもと、「ネイチャービンゴ」「カモフラージュ」の二つのプログラムを通じて、旭高原の大自然を五感で楽しく感じることができた。



<カモフラージュ>



そして、今度は校内の自然環境に目を向けようと、「校内ネイチャービンゴ」を体験し、身近にも自然があふれていることに気づくことができた。その中で、「池の水が汚れている」ことや「自生しているコスモスを育てたい」など、自然への関わりを求める発言が出てきた。

花壇の土作りやコスモスの植え替えをチームコ

スモスが、また、メダカ池の掃除をチームメダカが行い、自主的な活動ができた。



<チーム・メダカ>

<チーム・コスモス>

⑥ 6年生の実践

『守ろう地球 知ろう世界 一過去から未来へ』の年間テーマのもと、身近な環境から課題を見つけ、過去と現在の環境を比較・追究し、自分たちの未来の環境について考えさせ、実践を通して環境を大切にし、共によりよく生きようとする気持ちを育てたいと考えた。

修学旅行では、現在まで守られてきた歴史的建造物や江戸時代の町並みを再現した太秦映画村から、昔の環境について学んだ。

現在よりはるかに環

境にやさしく、無駄のない江戸のリサイクル社会につ

いて、寺小屋体験で学びました。ものを大切にする社会から「もったいない」という意識を学びました。



総合的学習の時間

に、世界約200か国の中から一人一人国を選び、世界にどんな国があり、人々がどのような生活をしているのか、以下の項目につ



いてインターネットなどで調べ活動を進めた。

・ 国調べ①

国名、国旗、面積、人口、首都、言語、通貨

・ 国調べ②

気候、自然、いろいろな都市、観光地、建造物、世界遺産

・ 国調べ③

人々の暮らし(衣食住)、環境問題世界の国について知識を増やして環境問題や環境保全について考えることができた。

⑦ グローブの観測体制

本年度はグローブ委員会を設置して5、6年生の児童が3つのグループに分かれ、観測活動と啓蒙活動、情報発信活動を行なってきた。



百葉箱に乾湿度計、最高最低気温測定器、気圧計

の整備を行い、毎日、2限休みに記録をとったり、雲の観測も行ったりした。また、委員会活動の時間に、近くにある川に出かけ、水質の観測も行った。観測には学区にお住まいの環境カウンセラーの協力をいただき、児童と共に環境について学習をしてきた。川は大きな用水路で流れはほとんどなく、常に濁っていた。しかし、鴨や鵜、亀が数多く生息し、姿は見えないが、餌となる魚が多く生息していることが分かった。観測した結果は児童がデータ送信したり、校内で全校児童に二酸化炭素の排出量削減を目指し、節電や節水など環境保全を呼びかける掲示などに利用してきた。また校内に設置した雨水タンクの利用を呼びかけるなど、環境に配慮した施設の充実にも努めてきた。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

自然とのかかわりを深めるきっかけづくりや、自然を大切にする授業や社会環境を意識させる体験活動、新聞やニュースなど社会の情報を取り入れた教科等の授業、多くの体験活動を積み重ねたことにより、身近な環境に興味をもち遊びや体験を通して、自然を大切にする心が育ち、環境を意識した生活や実践が見られるようになった。学校生活だけでなく、家庭においても環境を考えた行動がとれるようになってきている。また、教師自身の環境に対する考え方や感じ方の変化も見られ、環境関連の新聞記事やニュースが目につくようになったり、日常生活で植物、鳥、昆虫、空などの自然を眺めるなど、自然を楽しむ気持ちが高まってきている。

<児童の作文から>

「もったいない」を大切に 6年 服部 公美

私は4年生から6年生になるまで、ずっと環境の勉強を続けてきました。小さい子が手を洗うときに、水をジャージャーと出しっぱなしにしています。それを見た私たちは、「水は、むだに使うともったいないよ。必要な分だけ使うようにしてね」と声をかけます。このように私たちはいつも「もったいない」を合言葉にして、環境によりよい生活を心がけています。環境についてあまり知らない人たちに、教えてあげたり、注意したりするだけでなく、自分たちも実際に行なっていることが山ほどあります。たとえば、こんなことを行なっています。最近、ごみを捨てる人が増えてきています。そこで、私たちは「ゴミ」についての話し合いをすることにしました。クリーン作戦をし、ごみの種類や量を調べ、「地球に捨てられてしまったゴミたちを、どうすればよいのか」などをグループで話し合い、よい方法があるようなら、実際に行なうようにしています。お母さん方にも、家庭から出るゴミの量や種類などをインタ

ビューして、私たちに協力してくれることもあります。二酸化炭素を減らす、エコクッキングをしたこともあります。エコクッキングとは、環境のことを考えて、買い物や料理や片づけをすることです。環境によい買い物について学んだことは、スーパーにマイバッグを持っていくこと、野菜などは、ハウス栽培のものではなく、旬のものを買うことの二つです。旬のものは、ハウス栽培のものに比べて、作るのに必要なエネルギーが少ないからです。環境によい料理のしかたについて学んだことは、なべを使ってゆでるとき、水を入れすぎないこと、なべ底についている水滴は、ふいてから火にかけること、お湯を沸かすとき、最初は強火で、ふっとうしたら中火にすることの三つです。環境によい片付けについて学んだことは、なべや食器についた汚れは、いらぬ紙などでふきとってから洗うということ、食器を洗うときは、ため洗いをすることの二つです。こういう活動を世界中のみんなが心がけてくれると、とてもうれしいと思っています。私はこの他に、環境の劇をやったこともあります。その内容は、壊れたりさびついたりして人間に捨てられたものたちを、ゼベットというおじいさんが新品みたいに直して、新しい子どもたちが使ってくれる。捨てるのは「もったいない」ということをみんなに伝える劇でした。この劇は新聞やDVDにもなりました。

私が4年生になる前は、まったく環境のことを知りませんでした。電気がつけっぱなしでも、まったく気にしていませんでした。しかし、資源をむだに使っていることで、動物たちが苦しみ、さらには人間も危ないということを知り、とてもおどろきました。そんなふうにはならないように、これからも環境によい生活を心がけたいです。

2 研究の課題

心を育てることから環境教育を進めてきたが、身近な豊かな自然環境をもっと生かした実践活動や観測を取り入れた活動へつなげるなど、年間の計画に盛り込むようにしたい。



V 今後の展望

現在、豊かで便利な生活を当たり前のように享受している子どもたちに、環境問題を正しく認識させ、よりよい環境をつくるための態度を育成することは急務であるという認識のもと、これまで教科の授業で心を育て、グローブの観測活動も含め、様々な体験活動に取り組んできた。今後も環境学習を継続・発展させ、問題解決のための能力を育成することで、環境に対する責任をもった行動がとれる児童の育成を進めたい。